

紀尾井だより

9/10 September / October 2021 [Vol.149]

紀尾井ホール室内管弦楽団
2022年度定期演奏会 ラインナップ速報

新・首席指揮者

トレヴァー・ピノック就任

朗読と組踊

1719年と2021年の御取り持ち～おもてなし

連載

邦楽名曲解体新書 私のおすすめの一曲

尺八独奏曲『甲乙』

クラシック音楽のテーマに基づく3つの話

オーボエをめぐる3話

紀尾井町音楽散歩 第3回

大向こうでも「紀尾井町」



紀尾井ホール

2022年度



紀尾井ホール室内管弦楽団

Kioi Hall Chamber Orchestra Tokyo

ラインナップ速報!

新・首席指揮者の就任に合わせ、2022年度は次代を見据えたフレッシュさを目指しました。KCO初演作品も複数ご用意し、出演者も日本初登場の2名を含む4人がKCOにデビューします。KCO新時代の幕開けにどうぞご期待ください。

第130回

2022 4/22(金)19:00・23(土)14:00
首席指揮者就任記念コンサート

【出演】指揮 トレヴァー・ピノック

【曲目】<オール・モーツァルト・シンフォニーズ>
交響曲第31番ニ長調 K.297《パリ》
交響曲第35番ニ長調 K.385《ハフナー》
交響曲第39番変ホ長調 K.543

ピノックとの新たな旅の始まりとなる記念すべき回は、彼のもっとも得意な古典派作品の中からとびきりのセットをご用意しました。華やかな《パリ》、活力に溢れた《ハフナー》、そして作曲家が最晩年に到達した充実の極み第39番の「オール・モーツァルト・シンフォニーズ」です。



© ヒダキトモコ

第131回

2022 7/22(金)19:00・23(土)14:00

【出演】指揮 アントネッロ・マナコルダ [日本デビュー]
コントラバス 池松 宏

【曲目】シューマン 序曲、スケルツォとフィナーレ ホ長調 op.52
トッピン コントラバス協奏曲 ETW22 [KCO初演]
(トッピン没後40年記念)
メンデルスゾーン 交響曲第3番イ短調《スコットランド》op.56

「生粋のメロディスト」と称されるマナコルダが、得意とするメンデルスゾーン《スコットランド》交響曲を指揮して待望の日本デビューを果たします。コンチェルトには、KCOメンバーで日本が誇るコントラバス奏者池松宏の独奏で、エストニアの作曲家トッピンを採り上げます。



アントネッロ・マナコルダ
© Nikolaj Lund



池松 宏

第132回

2022 9/23(金・祝)18:00・24(土)14:00

【出演】指揮 トレヴァー・ピノック
ピアノ アレクサンドラ・ドヴガン [日本デビュー]

【曲目】ワーグナー ジークフリート牧歌 WWV 103
ショパン ピアノ協奏曲第2番ヘ短調 op.21
シューベルト 交響曲第5番変ロ長調 D485

首席指揮者ピノックの2回目は、華やかさはそのままに、古典派からロマン派へと目を向けてピノックらしい爽やかなロマンの息吹をお聴きいただけます。さらにショパンのピアノ協奏曲では、この年に15歳になる日本初登場のロシアの天才少女ドヴガンがソリストを務めます。



© ヒダキトモコ



アレクサンドラ・ドヴガン
© Oscar Tursuno

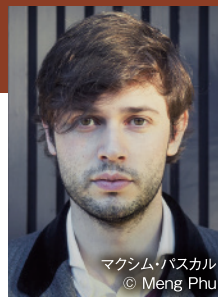
第133回

2023 2/10(金)19:00・11(土・祝)14:00

【出演】指揮 マクسيم・パスカル [KCOデビュー]
チェロ ニコラ・アルトシュテット [KCOデビュー]

【曲目】フォーレ 組曲《マスクとベルガマスク》op.112、
パヴァーヌ op.50
ショスタコーヴィチ チェロ協奏曲第1番変ホ長調 op.107
[KCO初演]
ベートーヴェン 交響曲第4番変ロ長調 op.60

2022年度の掉尾を飾るこの回にはパスカルとアルトシュテットがKCOデビューします。フォーレのこの上なく美しい旋律と和声、ホルンの活躍も華々しいダイナミックなショスタコーヴィチのコンチェルト、そして疾走感溢れるベートーヴェンの交響曲第4番と豪華に取り揃えました。



マクسيم・パスカル
© Meng Phu



ニコラ・アルトシュテット
© Marco Borggreve

2021年11月1日(月)12時(正午)
定期会員 新規募集開始!

●詳しくは紀尾井ホールウェブサイト

【告知】ニュー・イヤール特別演奏会 KCO名曲スペシャル vol.3

2023年1月20日(金)19:00、21日(土)14:00、22日(日)14:00 指揮/ライナー・ホーネック



© ヒダキトモコ

新・首席指揮者

トレヴァー・ピノック 就任

(任期3年間)

2022年度よりトレヴァー・ピノック氏が紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)第3代首席指揮者に就任します。

1970年代からのイングリッシュ・コンサートでの華々しい活躍をはじめ、現在のピリオド演奏ムーヴメントの礎を築き、今日まで牽引し続けてきた「レジェ

ンド」ともいべき氏を迎えることにメナバー、事務局ともども深いよろこびを感じ、これから始まる新たな挑戦に胸を踊らせています。

ピノック氏がKCOを初めて指揮したのは、旧紀尾井シンフォニーエッタ東京時代の2004年10月(第46回定期演奏

会)。その時のプログラムは、歌劇《フィガロの結婚》序曲、交響曲第29番、第41番のモーツァルト・セットでした。以後、バッハやベートーヴェン、ハイドン、フォーレなどの傑作を採り上げながら、昨年2020年2月の創立25周年記念特別演奏会を含む計5回の共演を重ねてきました。この17年間を通じて友情を育んできた氏とKCOは、2022年度からはその関係をさらに進め、首席指揮者として年2回の定期演奏会にご出演いただくことにいたしました。

ピノック氏の深い経験と知識をKCOに注ぎ込んでいただくこと。同時に、作品の躍動感や流れを活かした氏ならではの爽やかな音楽表現や、得意のバロック、古典派にとどまらず、かつ器楽から声楽まで広範なレパートリーを持つピノック氏の豊かな創造性をKCOとともに音楽ファンにお届けすること。——ホーネック氏とこれまで築いてきた成果の上に、ピノック氏とのパートナーシップをさらに積み上げてゆくことで、KCOの一層の充実を皆さまにお届けできればと願っています。

トレヴァー・ピノックから皆さまへ

このたび、紀尾井ホール室内管弦楽団の首席指揮者に就任することをとても嬉しく、そして光栄に思っております。

私にとって、このオーケストラの音楽家たちとご一緒するのは、日本を訪れる中で常にもっとも重要なことでした。私たちはこれまで17年間にもわたって共演を重ねることで、音楽作りにおいても、また大きく異なる文化を持つ人間同士としても、互いの理解と信頼を成長させてきました。中でも、KCOとは音楽上の共通点がとても多く、共同作業を通じて互いの感情や感動を分かち合う体験を積んでこられたのは、もっともエキサイティングで満足していることの一つです。

共に音楽を作っていく過程において人間的な側面は深く、重要です。日本人と英国人という異なる文化的伝統を持つ私たちが、にもかかわらず一致した表現方法を見出せるような音楽や我々の共有の人間性を探求することはきわめて意義深いことです。

2022年度から始まる日本の仲間との特別な旅が今から楽しみでなりません。

そして私たちは、聴衆の皆さまにとっても素晴らしいものをお届けできると確信しています。

Trevor Pincock



© Gerard Collett



© Gerard Collett

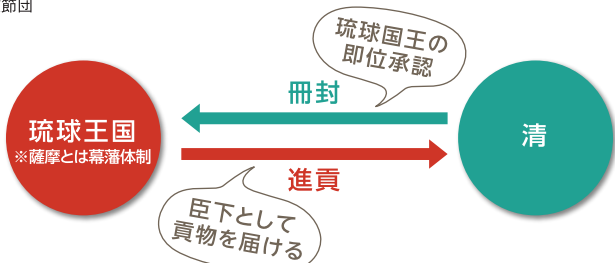
朗読と組踊



組踊は琉球と深い関係にあった中国の皇帝からの使節を歓待するために、玉城朝薫によってつくられた楽劇で、1719年に初めて演じられました。琉球の国劇ともいわれ、琉球王国時代から現在まで、連続と受け継がれています。



冊封使節団



中国皇帝が新しい琉球国王を認めるために派遣した使節(冊封使)は、帆船で往来するため、風を待つて半年ほど琉球に滞在しました。その間に七つの宴が催され、玉城朝薫はこの形式を整えたといえます。宴では歌舞だけでなく、首里城近くの池に船を浮かべたり、仕掛け花火を披露したりと趣向が凝らされました。歓待の様子は、北京の故宮博物院所蔵の「冊封全図」と「琉球全図」に考察を加えた『冊封琉球全図 一七一九年の御取り持ち』(国立劇場おきなわ監修・雄山閣)に詳しく書かれています。「御取り持ち」とは、「おもてなし」のことです。

組踊は宴の一つ「重陽の宴」で初演されました。今公演でも上演される「執心鐘入」と「二童敵討」です。同じく「朝薫の五番」に数えられる「孝行之巻」「銘苺子」「女物狂」もほかの宴で上演されたと考えられています。観覧する冊封使一行には、芸能番組を解説した文書が提供されました。例えば「執心鐘入」なら、主な登場人物である「中城若松」と「宿の女」の出自など、舞台を見ただけでは分からないことも記されています。パンフレットを頼りの観劇は、現代の観客とも似ている気がします。

琉球は、1609年の薩摩侵攻によって、中国の冊封体制と日本の幕藩体制との間で揺られていきます。その中で王府の儀礼としての芸能の上演は、琉球の独自性と儒教を尊ぶ国であることを示す狙いがあったとされます。組踊は国家プロジェクトで、玉城朝薫は国王から重い仕事を命じられていたのです。

しかし、今回の公演の原作「花の碑」の作者・大城立裕さんは「芸術のジャンルを創造するのに、国王の命のみで可能だとは思えない」と記しています。日本復帰前の琉球政府時代から行政の要職を務める一方、沖縄初の芥川賞作家になるなど芸術の道を歩んだ大城さんの言葉だけに重みがあります。脚本・演出の嘉数道彦さんは「花の碑」を演劇化した「風花」に出演、大城さんが組踊誕生を題材に脚本を書いた「今日ぬ誇らしや」では国立劇場おきなわの芸術監督として演出を手がけました。琉球王国の滅亡や沖縄戦などさまざまな困難をこえて沖縄の人々に大切にされてきた組踊の誕生を描く朗読劇の初演。公的な場の要請に応えながら、自身の芸術家としての信念も譲らない2人の姿は、玉城朝薫と重なるようにも見えるだけに、組踊の始祖と後継者の交感に期待が高まります。

文／真栄里泰球(沖縄タイムス記者)

朗読と組踊

琉球楽劇の創始者 玉城朝薫が紡いだ歌舞

第一部 朗読劇「國戯誕生～玉城朝薫が紡いだ歌舞～」
(昼・夜 共通)
原作:大城立裕「花の碑」
脚本・演出:嘉数道彦
振付:玉城匠、音楽:仲村逸夫
第二部 (昼)組踊「執心鐘入」
(夜)組踊「二童敵討」

10/6
水
昼14:00
夜18:30

※公演開催についての最新情報は 紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。



© 大城洋平

組踊「執心鐘入」(琉球横笛「入嵩西論独演会」清風の音より)

尺八独奏曲

『甲乙』

お話／田辺頌山さん

尺八の新しい境地を開いた山本邦山氏

『甲乙』は私の師匠である山本邦山先生が作曲した尺八独奏曲です。先生は都山流の尺八演奏家で、作曲家でもありました。東京藝術大学教授を務められ、人間国宝にも認定されるなど、尺八界の第一人者でいらっしゃいました。

私が先生とお会いしたのは大学一年のころ。父が地元岡山で尺八教室を開いていたので、私も幼いころは吹いていたのですが、思春期になると「尺八なんて年寄り臭い」と感じて離れていました。ですが大学入学のために上京後、すぐに邦山先生の演奏会を聴く機会を得ました。先に上京していた兄(田辺湧山)が、先生入門していたからです。間近で聞いた先生



の演奏は、もう「衝撃」のひとつ。今まで聴いてきた尺八とは違う楽器かと思うほどに音が全然違うんです。そのあと兄がレッスンを受けているところも見学し、私もその場で入門させてもらいました。

先生は十五歳ごろから作曲し、二十五歳で尺八二重奏曲『竹』を作曲して受賞。二十代後半よりジャズやポップスとのコラボレーションにも積極的に挑戦されてきました。即興を楽しむジャズと合わせるには、尺八の演奏も自由でなければいけません。従来の尺八の奏法にとらわれず、音同士で会話をしないとけない。『甲乙』の斬新性は、きつとそういう音楽との出会いから生まれたのだと思います。

古典と現代のバランスがとれた画期的な曲

甲乙とは尺八の楽譜で音の高低を示す記号で、「甲」は高音を、「乙」は低音を

示します。この曲は音の高低を明確に表現しようと試みた作品であり、テンポは緩―急―緩―急―緩が繰り返されます。ゆっくりとした部分は古典的な奏法と旋律。速い部分は現代風で、本来の尺八の奏法にはないタンギングを多用し、軽

快な曲調です。タンギングとは管楽器を演奏する際の舌を用いた技法で、小学校のリコーダーの授業で習ったという方も多いでしょう。一方で古典的な部分では「コロコロ」(細かい指の動きによるトレモロ奏

法)など尺八らしさも残している。古典と現代のバランスがとれた画期的な曲だと思います。初めて尺八を聴く人の中には古典の曲を退屈に感じてしまう方もいるかもしれませんが、『甲乙』なら尺八の魅力が伝わるのではないのでしょうか。「尺八ってこんなこともできるんだ!」という感想をいただくこともありますよ。

尺八の形はシンブルに見えますが、実はたいへん難しい楽器。息と五つの指孔だけで三オクターブの音域を表現します。押せば音が出るような楽器とは違って、尺八初心者はず音を鳴らすこと自体が大変。やつと音が出せるようになって、今度は五つしかない孔で音程を自分で作らないといけない。唇と歌口(息を当てる吹き口)との距離を近づけると音程がやや下がり、逆に離すと上がります。指孔も全部塞いだり半分塞いだり、首を

振って音を揺らしたりして、息づかいや指づかいなどで幾通りもの音を作ります。いま尺八界は若い演奏家がたくさん育っています。今の若者は尺八に「お年寄りが吹くもの」というイメージすらない世代で、抵抗がないみたい。僕の同世代の友達も、若いころは「尺八なんて」と言っていました。大人になって聞いてみると「あ、結構いいな」と言っていますよ。

取材・文・イラスト／尾花 知美

(月刊『江戸楽』編集部)

田辺頌山

早稲田大学入学と同時に初代山本邦山に師事。NHK邦楽技能者育成会第二十七期修了。NHK邦楽オーディションへ合格。都山流尺八楽会准師範、師範試験に首席登第。平成五年長谷検校記念第一回全国邦楽コンクール最優秀賞受賞。都山流尺八楽会竹琳軒大師範。



オーボエを めぐる 3話

オーケストラ奏者たちが舞台上に現れ
着席すると、オーボエがA(ラ)の音を奏
で、それを基準にして皆がチューニングを
始めます。さあ、いよいよコンサートが始
まる！とワクワクする瞬間です。

今回はオーボエにまつわるお話です。

1 オーケストラの基準音は なぜオーボエが出すのか

なぜオーボエが基準音A(ラ)を出す
のでしょうか？ 答えはオーケストラの歴史
にあります。

オーケストラはまずヴァイオリン属な
どの弦楽器の合奏から始まりました。そ
の後そこに管楽器としてまずオーボエ
(そして同じダブルリード属の低音楽器
であるファゴット)が加わります。弦楽器
はその場で調弦をしますが、オー
ボエは音程を微調整する仕組みを構造

上持っていないのです。オーボエにとって、
もつとも敏感な部分である振動体(リ
ード)を奏者は原材料の葦から自作しま
すが、この時点で正しい音律が出せるよう
準備します。よってオーケストラの現場で
はオーボエが出す既に整えられた音を基
準に弦楽器は調弦することとなります。
科学的にもオーボエの音波型は遠く
まで音が通りやすく、音程も認知しやす
いと言われていきますので、役目としても
ふさわしいでしょう。

2 オーボエ黄金時代

オーケストラの草創期から使用され始
めたオーボエは、まずバロック時代に大活
躍することとなります。バッハ、ヘンデル、
テレマンらの作曲家たちは、オーケストラ
はもちろん、カンタータ、協奏曲や室内楽
などの多岐にわたりオーボエのための作
品を多数書きました。オーボエにとって
黄金時代だったと言えるでしょう。そし
てその流れは古典時代にも続きます。ハ
イドン、モーツァルト、ベートーヴェンとい
った作曲家たちは、オーケストラで重要
ともいえる役割をオーボエに引き続き与
えるとともに、当時流行していた管楽合
奏曲などの室内楽(パーティのBGMとし
て屋外で演奏されることも多かった)や
協奏曲にも起用しました。

3 時代が変わっても センターは オーボエの定席

新しい楽器たちも登場しま
す。例えばクラリネットは晩年
のモーツァルトが惚れ込んだ楽
器でしたし、教会楽器であった
トロンボーンもオーケストラに
加入します。それら多種多様
な楽器の加わったオーケストラ
の中でも、オーボエは独特な音
色と情感を持つ歌い手として
センターに座り続けました。
シューベルト、シューマン、ブラーム
スなどはほど美しいメロディーと
靈感を数多くオーボエに与え
てくれたでしょう。ロマン派の音
楽性もオーボエの歌謡性にぴたりだっ
たのです！ しかし残念なことに、この時
代にはこの楽器のソロ作品はほとんど残
されておらず、サン＝サーンスやR. シュト
ラウスなど20世紀に入るまで待たねば
なりません。古参であるがゆえに、他楽
器に比べ改良が遅れたためとも言われて
います。そのためオーボエ奏者はブラーム
スが、ドビュッシーやラヴェルがソロ作品を
書いていてくれたら……とついつい妄想
してしまうのです。

文/古部賢一
(オーボエ奏者、東京音楽大学准教授)



© ヒダキトモコ

オーボエはオーケストラのセンターが定位置。(紀尾井ホール室内管弦楽団定期演奏会より)

オーボエをめぐる紀尾井ホール公演

ハイツ・ホリガーと仲間たち
～管楽アンサンブルの魅力～

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、
公演を中止することいたしました。

10/1
金
19:00

ペーター・レーゼルの ピアノサロンによろそ(有料)

10月11日(月) 18時開始/17時15分開場
紀尾井小ホール(5階/250席)

グランドピアノのあるサロンさながらの親密な雰囲気のなかで、ペーター・レーゼルと過ごす贅沢なひとときをお楽しみください。トークの聞き手・通訳には岡本和子さんを迎え、幅広いトピックスについて語っていただきます。興に任せてのピアノ演奏では何が飛び出すかどうぞ期待。

料金:3,000円・消費税込み(全指定席・友の会会員ご本人様限定※)
発売:9月1日(水)12時(正午)

おみやげ付き

(お一人さま 1部)

イベント参加者全員に、
岡本和子さんの
独自取材による評伝
「ペーター・レーゼル

～真摯に音を紡ぐ」
(今回限定発行※)をプレゼント。

※10月13日(水)リサイクルでは
一般価格1,000円で数量限定
会場販売の予定。



© 山野雄大

※紀尾井ホールウェブチケットのみで販売。ウェブチケットから紀尾井友の会にご入会后、すぐにお申込みいただけます。

紀尾井友の会は2022年3月末日をもって終了いたします。本年度3月には会員限定のファイナル・イベントの開催を予定しています。新規ご入会および現会員期間終了後にご継続の場合は会費2,000円で各種特典をご利用いただけます。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

フォトレポート 最近の公演から

7.8(木) 紀尾井 明日への扉 第29回 樋渡希美(打楽器)



前半は世界中から集まった多様な打楽器とマリンバ、そしてボディパーカッションのソロ。後半メインプログラムは共演者3名とともに、和楽器も用いたアンサンブルで客席を魅了しました。



第31回 日本製鉄音楽賞 受賞記念コンサート 映像配信中

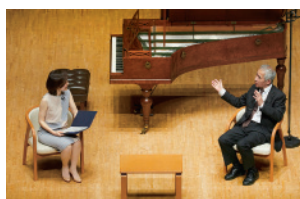
無料

フレッシュアーティスト賞に輝いたフォルテピアノの川口成彦さんによるミニコンサートと、特別賞を受賞されたステージマネージャーの猪狩光弘さんによるトーク。約2時間の受賞記念コンサートを紀尾井ホールYouTubeチャンネルで配信中しています。コンサートでは前回受賞されたバリトンの大西宇宙さん、鍵盤奏者の小林道夫さんもスペシャルゲストとして出演! この日限りの特別な演奏会、ご自宅などでどうぞお楽しみください。

紀尾井ホール
YouTube
チャンネル



ゲストの小林道夫さん、大西宇宙さんとともに



猪狩光弘さんのトーク(司会 田添菜穂子)



川口成彦さんのミニコンサート

編集後記



紀尾井ホール室内管弦楽団の次期首席指揮者が発表になりました。これまでも節目節目の大事な演奏会で共演してきたトレヴァー・ピノック氏とともに、2022年度から3年間活動します。楽団のまた新しい表情をお見せできると思いますが、ますますパワーアップするサウンドにもどうぞご期待ください。

今号の表紙

『胡弓と菊』

【協力】花/hanadouraku 胡弓/川瀬露秋

江戸時代から日本独自に進化してきた胡弓。馬の毛で作られた長い弓も特徴的で、西洋の弦楽器のように弓の角度を変えるのではなく、楽器本体を回しながら3本ないし4本の弦を擦って奏でます。菊は奈良時代に伝わり、古くから親しまれ、日本を象徴する花の一つ。9月9日重陽の節句は別名「菊の節句」とも呼ばれ、秋を代表する花です。

紀尾井ホールにご支援いただいている企業および個人の方々です

紀尾井サポートシステム会員 (五十音順・「株式会社」等表記及び敬称略)

《特別協賛会員》 A.ランゲ&ゾーネ/日鉄ソリューションズ/三菱商事/三菱地所
 《みやび会員》 伊藤忠商事/大島造船所/KDDI/菅原/住友商事/丸紅/三井住友銀行/三井物産/三井不動産/三菱商事/三菱地所/メタルワン ほかに匿名2社
 《ひびき会員》 オカムラ/きらぼし銀行/高砂熟学工業/竹中工務店/山下設計
 《みどり会員》 青鬼運送/赤坂維新號/赤坂 エクセルホテル東急/今治造船/ヴォートル/エーケーディ/NTTドコモ/荏原冷熱システム/鹿島建設/ザ・キャピトルホテル 東急/三協/清水建設/上智大学/西武プロパティーズ/大成建設/千代田商事/テイスト・ライフ/東芝ライテック/永田音響設計/ニュー・オータニ/ハウス食品グループ本社/パナソニック/富士フィルムビジネスイノベーションジャパン/松尾楽器商会/三井住友信託銀行/三菱UFJ銀行/三菱UFJ信託銀行/三菱UFJモルガン・スタンレー証券/ミュージジョン/明治座舞台/ヤマハサウンドシステム/有帆
 《おい会員》 青木陽介/飯沼万里子/石崎智代/磯部治生/井上善雄/植竹浩樹/大武和夫/小島 徹/片山能輔/久保祐子/栗山信子/佐久間庸行/佐部いく子/清水 正/清水多美子/清水康子/白土英明/鈴木 亮/高下謹彦/田中 進/外山雄三/鳥居荘太/中塚一雄/中西達郎/西村剋美/原田清朗/北條哲也/堀川将史/牧本恵美子/松枝 力/松本美恵/簗輪永世/宮本信幸/陸田 実/村上喜代次/持留宗一郎/八木一夫/八木晶子/山内寿実/吉峯裕毅
 ほかに匿名23名 計189口

特別支援会員 (五十音順・「株式会社」等表記略)

アステック入江/五十鈴/NST日本鉄板/NSユナイテッド海運/NSユナイテッド内航海運/エヌエスリース/エヌテック/王子製鉄/大阪製鐵/丸薬工業/草野産業/黒崎播磨/合同製鐵/小松シャリング/山九/産業振興/三晃金属工業/サンユウ/三洋海運/ジオスター/新日本電工/スガテック/大同特殊鋼/大和製鐵/高砂鐵工/高田工業所/鶴見鋼管/DNPエリオ/テツゲン/東海鋼材工業/東邦シートフレーム/トピー工業/日亜鋼業/日鉄環境/日鉄ケミカル&マテリアル/日鉄建材/日鉄鋼管/日鉄鋳業/日鉄鋼板/日鉄興和不動産/日鉄ソリューションズ/日鉄テックスエンジニア/日鉄ドラム/ (旧)日新製鋼/日鉄物産/日鉄物流/日鉄物流君津/日鉄物流八幡/日鉄保険サービス/日鉄ボルテン/日鉄溶接工業/日本金属/日本触媒/濱田重工/富士鉄鋼センター/不動テトラ/幕張テクノガーデン/三菱金属工業/三島光産/宮崎精鋼/吉川工業
 日本製鉄 (2020年度、匿名1社除く)

(2021年8月1日現在)



紀尾井町音楽散歩 [第3回] >> 大向こうでも「紀尾井町」

本連載3回目は紀尾井の「井」となる、近江彦根藩井伊家の敷地まつわるお話です。井伊家は徳川譜代の大大名として江戸城桜田堀に面したところに上屋敷があり、紀尾井ホール正面口の向かい側、現在のホテルニューオータニの敷地一帯が中屋敷となっていました。明治になり、この敷地は皇族の伏見宮邸として生まれ変わり、昭和20年ごろまで宮邸として使われます。その後、実業家の大谷米太郎がこの地に日本を代表するホテルを建設し、いまに至ります。ところで、この敷地の東側に伸びる紀尾井町通りは、現在ホテルに隣接する施設やレストラン、商業ビルが建ち並びますが、今から半世紀ほど前、この場所には日本の芸能界や音楽界に大きな足跡を残したかたの邸宅がありました。

その中の一つに、戦後の歌舞伎界を代表する名優にして人間国宝・文化勲章受章者の二代目尾上松緑(大正2年-平成元年)のお住まいがありました。歌舞伎観劇の醍醐味のひとつに大向こうのかけ声がありますが、二代目場合は「紀尾井町!」や「弁慶橋!」という声がかかるほど、この町と深いご縁がありました。紀尾井坂を下った交差点の近く、現在Rinken Kioicho Bldg Oneが建つこの場所に、昭和29年ごろから平成元年ごろまで居を構えていました。邸内は和館と庭側の斜面の上に東屋を配した造りで、



二代目 尾上松緑

当時は門の前に幅3メートルほどの小川が流れ、小橋を渡ってから邸内に入るようになっていたとのこと。自邸の裏手でホテルニューオータニの建設が始まった昭和38年、二代目はNHK大河ドラマ第1作目となる「花の生涯」に出演し主役の井伊直弼役を演じますが、井伊家の中屋敷跡に自身の住まいを構

えていたことは、偶然とはいえ、とても興味深いエピソードです。また、この二代目邸の数軒先には、童謡の“うたのおばさん”として多くの人々に親しまれた声楽家の松田トシ(大正4年-平成23年)邸がありました。戦前から歌手として活躍する一方で数多くの有名歌手を育てた名教師でもあり、母校東京藝術大学声楽科の成績優秀者に贈られる「松田トシ賞」に、その名を残しています。さらに、二代目邸と松田邸の間には、新派の大看板として演劇界に重きをなした、初代水谷八重子(明治38年-昭和54年)の御宅もありました。

日本家屋が建ち並び、閑静な趣を醸し出していた紀尾井町通りも、昭和50年代ごろから本格化した町の再開発で大きく様変わりしましたが、この町の魅力は昔も今も変わりありません。江戸の昔から今日まで、数多くの名士たちが集い暮らしていたことに思いをはせ、紀尾井町内を散策してみたいかがでしょうか。 <K>

[取材協力]
鈴木研司様・戸田豊重様・戸田道代様(50音順)



1960年代の紀尾井町の様子 (提供:ホテルニューオータニ)



公式SNSで最新情報配信中



紀尾井ホール

紀尾井ホール
室内管弦楽団



チケットのお申込み

紀尾井ホールウェブチケット <https://kioihall.jp/tickets>

※紀尾井ホールチケットセンターの電話受付は3月31日をもって終了いたしました。

紀尾井ホール

公益財団法人 日本製鉄文化財団
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号 TEL.03-5276-4500(代表) FAX.03-5276-4527 <https://kioihall.jp>

